論　文

CASECによる英語基礎学力評価と「英語に対する意識調査」分析
—健康福祉学部二年生の場合—

渡邉真理子・馬塲佐和子

（西九州大学健康福祉学部社会福祉学科・健康栄養学科）

（平成21年11月5日受理）

Assessment of English Proficiency Using CASEC's Scores and an Analysis of Students' Attitudes toward English Learning

Mariko WATANABE and Sawako BABA

Department of Social Welfare Science, Department of Health and Nutrition Science, Faculty of Health Social Welfare Science, Nishikyushu University

（Accepted: November 5, 2009）

Abstract

The recent survey of the actual conditions of Japanese universities reports that the academic ability of students has been generally falling. In Nishikyushu University the poor English ability of students has been a long outstanding problem. One of measures taken to deal with the situation is to enforce proficiency grouping on English classes. We innovated class grouping based on English proficiency in the academic year of 2001, which has produced some good results.

What we wish to show in this paper is as follows. First, this paper reports the objective assessment of our students' English proficiency levels, using scores of CASEC (Computerized Assessment System for English Communication). They are far below the national average of university students in correlation with STEP test, TOEIC and TOEFL. Second, we made a survey of students' attitudes toward English learning. The results of the survey are analyzed and discussed in terms of motivating students to learn, improving EFL teaching and the appropriateness of proficiency grouping.

キーワード：英語基礎学力評価、英語に対する意識

Key words：Assessment of English proficiency, Students' attitudes toward English learning

Ⅰ　はじめに

大学の現状に関する最近の調査(読売新聞社第２回「大学の実力　教育力向上の取り組み」）によれば、入試の多様化により、学力試験を経ずに大学に入学する学生の割合は年々増加し、今年度約五割となった。この結果、入学生の基礎学力の低下と「学力のばらつき」に対し、リメディアル教育等、有効な対応への模索が緊急の課題となっている。授業を進めるにあたって到達度試験を実施して学生の学力を測る大学は80％以上に達し、科目別では英語が最多の73％である。習熟度別クラス編成も英語が最も多く、74％の大学で実施されている。

西九州大学においても、一般入学試験による入学者が漸次減少し、平成６年度より英語が一般入試の必須科目から選択科目へ移行した後、入試における英語受験者の全入学者に占める割合は急激に減少した。図１に見られるように、健康福祉学部では英語受験者の占める割合が平成10年度には43％であったのに対し、平成21年度はわずかに3.9％であった。

入試において英語の学力試験を経てきたか否かにより入学者の英語の基礎学力に大きな差が認められること、また学生の全体的な英語の基礎学力の低下が、入試における英語受験者の減少と明らかに連動していることは、平成15年度健康福祉学部入学者に対して行った調査(「英語教育における到達度別クラス編成導入とニーズ分析」西九州大学紀要第34号）で明らかとなった。この調査では、英語学力の上位層、中位層、下位層のうち、入試における英語受験者の85.1％が上位層に、10.4％が中位層に位置し、下位層に位置した学生はわずかに1.5％であった。英語の学力試験を経ない入学者の増加は、「学力のばらつき」に加えて、英語基礎学力下位層の学生の多くが英語学習への意欲が極めて低く、クラス全体の熱意と活性化に影響を及ぼすという看過できない状況を引き起こした。このため、平成13年度入学者より健康福祉学部に対して、英語の必修科目において習熟度別クラス編成の導入に踏み切り、個々の学生のレベルと学習速度に応じてできるだけきめ細かい指導を目指すこととした。この結果、前述の平成15年度調査において、習熟度別クラス編成により一定の教育成果が得られることが実証された。特に下位層の学生のうち、ある程度の潜在能力を有しながら、それまでの教育のいずれかの段階で苦手意識を増幅させてきた学生にとって、初歩的レベルにまで立ち返って対応することで有効な成果が得られることが明らかになった。平成19年度入学者までは、教員手作りの筆記試験のプレイスメントテストによりクラス編成を実施したが、リスニングも含めた英語の４技能をより正確に測り、加えて他大学学生との学力の相対的評価を得て学習意欲の向上へとつなげるために、平成20年度入学者から CASEC（Computerized Assessment System for English Communication）使用によるプレイスメントテストを実施することとした。また、学生の英語や異文化への興味と関心、英語学習に対して学生が望むことや目指す方向を把握して、今後の授業の内容、方法等の改善を図るために、2009年10月、１年次と２年次全学生を対象として「英語に対する意識調査」を実施した。

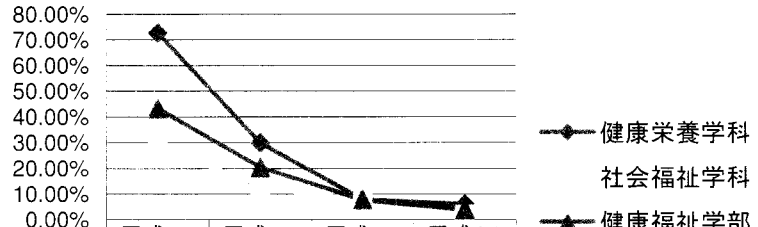
本稿は、CASEC による本学学生の英語基礎学力の客観的評価の報告と、上記「英語に対する意識調査」のうち、健康福祉学部２年次生の集計結果を CASEC との関連を交えて分析、考察するものである。

Ⅱ　健康福祉学部 CASEC スコア結果分析

１．CASEC 概要と実施

CASEC とは、財団法人日本英語検定協会が基礎開発し、株式会社教育測定研究所が開発・運営する、インターネット上で受験する英語コミュニケーション能力判定テストである。これまでに全国の企業、大学、高校、中学など約490団体が導入しており、年間約11万人が受験している。Section 1 から Section 4 までの四つのセクション（各250点）から構成される1000点満点のテストであり、受験後すぐに結果がオンラインで表示されるため、受験者はその場で自分のスコアおよび弱点項目を発見す

図１　健康福祉学部：英語受験者の入学者に占める割合



	平成10年度	平成15年度	平成20年度	平成21年度
健康栄養学科	72.70%	29.90%	7.89%	6.06%
社会福祉学科	29.50%	12.70%	7.63%	1.89%
健康福祉学部	43.20%	20.40%	7.76%	3.90%

ることができる。約40分という短時間のテストでありながら、英検相当級・TOEIC 換算スコア・TOEFL 換算スコアを知ることができる点は、受験時の自己の英語基礎力を相対的に把握することができ、学習への動機づけとなることが期待できるとともに、これらの試験に関心をもつ受験者の学習意欲を奨励するものであろう。問題の正誤数によってスコアを算出する一般的なテストとは異なり、受験者個人の解答の正解・不正解に合わせて次に提示される問題の難易度が変更されていく「適応型」を特徴とするため、学力が低い学生にも対応できるといえる。

本学では1年次「英語表現Ⅰ」及び「総合英語Ⅰ」の授業の一環として、健康福祉学部（健康栄養学科・社会福祉学科）平成20年度入学者に対し CASEC を二回実施した。一回目は平成20年度の英語習熟度別クラス編成のためのプレイスメントテストを兼ねた「プレテスト」として2008年4月に、二回目は2年次のプレイスメントテストを兼ねた「ポストテスト」として2009年1月に実施した。以下、スコア結果を分析し、本学の英語教育が今後取り組むべき課題を明らかにする。

2．CASEC スコア結果分析

1）健康栄養学科

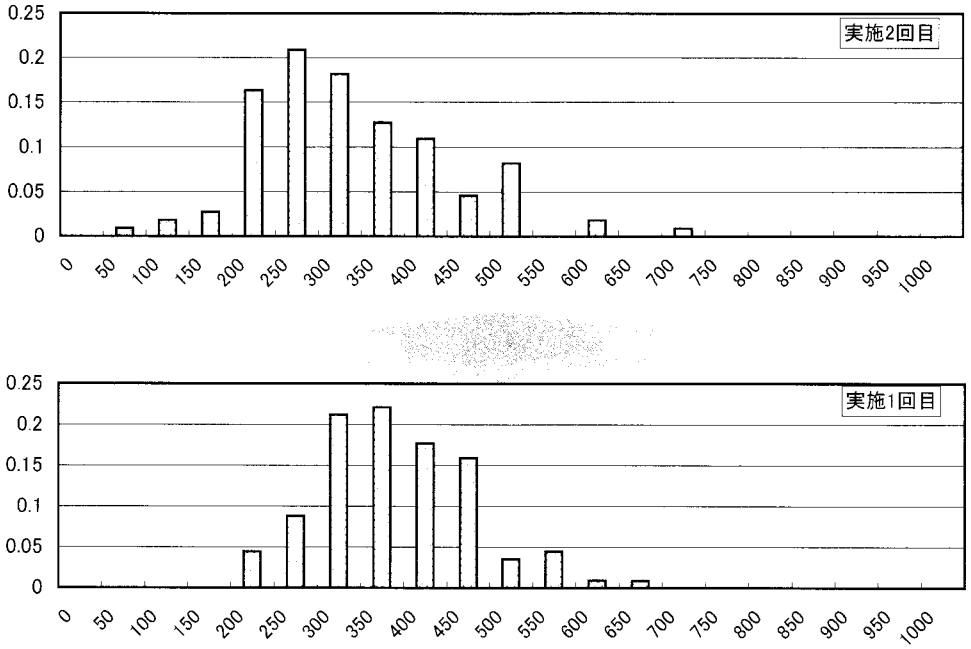
プレテスト（113名受験）の CASEC トータルスコア平均は343点、ポストテスト（110名受験）のスコア平均は290点であった。

この数値は6段階評価からなる CASEC Level（AA・A・B・C・D・E）において最下層の「レベルE＝挨拶や紹介などごく初歩的な応答などが可能」に位置するものである。プレテストを1としたポストテストの相対度数は0.85であり、スコア平均は低下している。このような学力低下の背景に、ある程度の英語の授業時間数が確保され継続的な学習が求められていた高等学校を卒業し、基本的に週一回（90分）の授業しかない大学へ入学するという、受験者の学習環境の変化があることは否めない。健康栄養学科（以後、健栄）全体におけるトータルスコア上位25%（上位層）の平均点は、プレテスト459点、ポストテスト444点であり、それほど大きな変動は認められない。一方、下位25%（下位層）は、プレテスト平均241点からポストテスト平均166点へと明らかに低下している。つまり、学力的に下位の学生ほど大学入学後の学力低下が著しいようである。図2に示されるように、平均点より上位層のトータルスコア度数分布はプレテストとポストテストではそれほど変わっていない。しかし、下位層に注目すると、プレテスト時点では少数派であった250点以下の学生数がポストテストでは増加している。なお、プレテスト、ポストテストともに最高スコア（プレテスト649点、ポストテスト697点）を獲得し

表1

健康栄養学科	人数	Section 1	Section 2	Section 3	Section 4	Total	TOEIC 換算点	TOEFL 換算点
プレテスト平均	113	89.7	88.9	91.7	73.1	343.5	302.6	363.0
ポストテスト平均	110	73.4	77.0	76.2	63.7	290.3	246.5	335.2
相対度数(対プレテスト比較)	0.97	0.82	0.87	0.83	0.87	0.85	0.81	0.92

図2　トータルスコア度数分布の比較（健康栄養学科）



た最上位の学生は、大学入学後も何らかの目標を設定し自主的に英語学習を継続していることが推測される。特に下位層の学生に対しては、どのような学習の動機づけが有効であるのか検討することが必要であろう。

続いて、セクション別のスコアを分析する。各セクションは250点満点であり、そのうち Section 1（語彙の知識）のスコア平均はプレテスト89.7点に対してポストテスト73.2であった。その他のセクションも同様であり、Section 2（表現の知識）は88.9点から77.0点へ、Section 3（リスニングでの大意把握）は91.7点から76.2点へ、Section 4（具体情報の聞き取り能力）では73.1点から63.7点、とすべてにおいて低下が認められた。ポストテストにおけるセクションごとのスコア分布によると、語彙力と表現力を問う Sec 1、Sec 2 に比べ、リスニング力を問う Sec 3 と Sec 4 では最低スコア（0～10）を得点した者の割合が高い。このことから、本学科の学生は文法よりもリスニングを苦手としていることが分かる。Sec 4 のスコア平均が他の三つと比べて特に低いのは、与えられた選択肢から解答を選ぶ客観式の問題ではなく、正しいスペリングで単語を入力しなければならないディクテーションの問題だからであろう。事実、「単語を聞き取ることは出来たが、綴りが分からなかった」という感想が受験後の学生から寄せられた。この Section 4 の出来・不出来がトータルスコアにも影響していると考えられる。

2）社会福祉学科

プレテスト（129名受験）の CASEC トータルスコア平均は330.4点、ポストテストの（126名受験）スコア平均は274.8点であった。

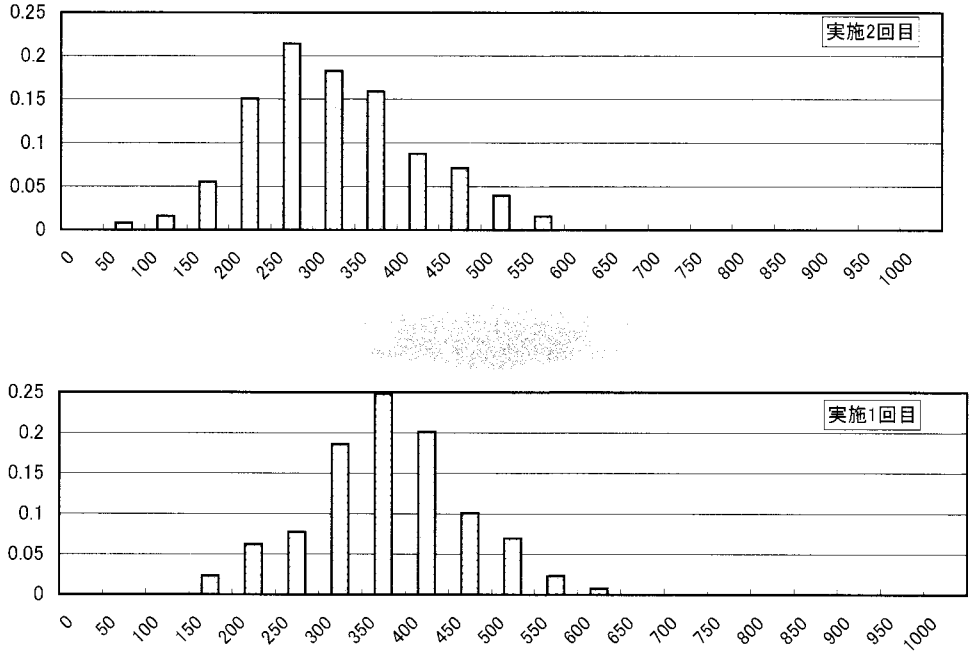
CASEC Level は健栄と同じく「レベル E」となった。プレテストを1としたポストテストの相対度数は0.83であり、健栄とほぼ同じ比率でスコア平均は低下した。上位層の平均点は、プレテスト446点、ポストテスト411点であり、健栄の同データと比較すると若干低下率は高いものの、それほど大きな差は認められない。健栄と同じく、下位層はプレテスト平均220点からポストテスト平均156点へと低下した。トータルスコア度数分布のプレテストからポストテストへの変化は図1の健栄と比較しても大きな違いは認められない。

社会福祉学科（以後、社福）のプレテスト最高スコアは600点、ポストテスト最高スコアは546点である。CASEC ではトータルスコア600点から759点までを「レベル B＝日常生活や社会生活で交わされる基礎的な内容についてのコミュニケーションが可能」、450点から599点までを「レベル C＝日常生活で交わされるごく一般的な内容についてのコミュニケーションが可能」としている。つまり、健康福祉学部の平成20年度入学者のうち上

表 2

社会福祉学科	人数	Section 1	Section 2	Section 3	Section 4	Total	TOEIC 換算点	TOEFL 換算点
プレテスト平均	129	86.9	88.3	88.0	67.2	330.4	292.0	357.9
ポストテスト平均	126	71.5	72.1	72.4	58.8	274.8	232.7	330.0
相対度数（対プレテスト比較）	0.98	0.82	0.82	0.82	0.88	0.83	0.80	0.92

図 3　トータルスコア度数分布の比較（社会福祉学科）



記の「レベルB」に相当する学生は、プレテスト時点では、健栄、社福ともにそれぞれ1名、ポストテスト時点では健栄一名のみとなった。

社福のセクション別スコア平均を見ると、Section 1（語彙の知識）はプレテスト86.9点に対してポストテスト71.5点であった。Section 2（表現の知識）は88.3点から72.1点へ、Section 3（リスニングでの大意把握）は88.0点から72.4点へ、Section 4（具体情報の聞き取り能力）では67.2点から58.8点、と全セクションにおいてスコアが低下していることが明らかになった。セクションごとのスコア分布には、わずかながら健栄との違いも認められる。例えばSec 3では、150点以上の高得点者は少ないものの、10点以下の最下位スコア取得者の数も少ない。リスニングでの大意把握力に関しては、健栄よりも社福の学生ほうが個人間の学力の差が少ないといえる。

3）英検相当級およびTOEIC換算スコア

ポストテストのスコアをベースに算出された英検相当級は、健栄では110名中73名が英検3級、30名が4－5級、6名が準2級、1名が2級、社福では126名中、英検3級に相当すると判定された学生が84名、4－5級が36名、準2級が6名であった。TOEIC換算スコア平均は、健栄が246.5、社福が232.7である。学科間に目立った差異は認められないものの、健栄のスコア分布が最低スコア90から最高スコア690まで広範囲にわたっているのに対し、社福では最低スコア105、最高スコア490であった。

4）健康福祉学部全体

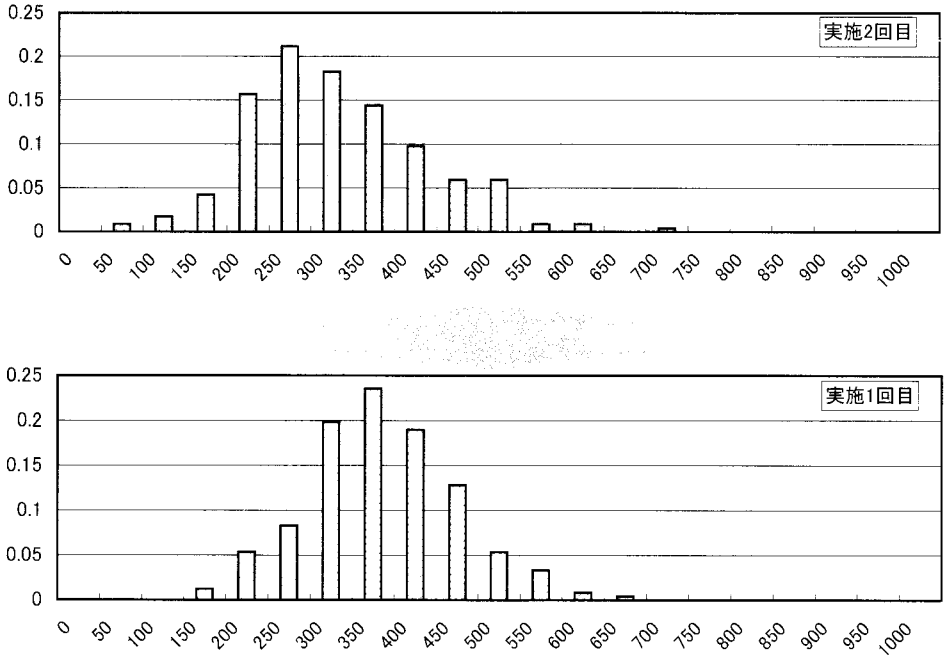
プレテスト（242名受験）のCASECトータルスコア平均は336.5点、ポストテストの（236名受験）スコア平均は282点で、CASEC Levelの「レベルE＝挨拶や紹介などごく初歩的な応答などが可能」が健康福祉学部学生の英語力に対する判定である。プレテストを1としたポストテストの比較値は0.84であり、約9か月の大学教育を経て英語力が低下したことを認めなければならない。前述した両学科における最高スコア、上位層および下位層のスコア平均、トータルスコア度数分布からも、わずかではあるが社福よりも健栄のほうが英語力が高いという結果が得られた。

英検相当級とTOEIC換算スコアについては図5、図6のとおりであり、ポストテストを受験した236名中、英検3級が157名（66.5%）4－5級が66名（27.9%）、準2級12名（0.05%）、2級1名（0.004%）であった。約7割の学生が英検3級（中学卒業程度）の英語力であることが分かった。TOEIC換算スコア平均は239.1点で、換算スコア分布表によれば、本学学生の大部分が200から250に相当する能力であることが分かった。これは、

表3

学部全体	人数	Section 1	Section 2	Section 3	Section 4	Total	TOEIC換算点	TOEFL換算点
プレテスト平均	242	88.2	88.6	89.7	70.0	336.5	296.9	360.3
ポストテスト平均	236	72.4	74.3	74.2	61.1	282.0	239.1	332.4
相対度数（対プレテスト比較）	0.98	0.82	0.84	0.83	0.87	0.84	0.81	0.92

図4　トータルスコア度数分布の比較（健康福祉学部全体）



日常会話で最低限のコミュニケーションが可能となるレベルの英語力を示している。

5）CASEC 受験全大学との相対度数

次に、本学学生の英語力のレベルをより客観的に把握するために、CASEC を導入している全大学のスコア平均と健康福祉学部20年度入学者のそれとを比較する。なお、以下に挙げる全大学平均データは2007年４月時点の、本学のデータは2009年１月時点のものである。

全大学のトータルスコア平均468.7点に対して本学は282.6点であり、相対度数は0.60である。すでに図６において示されたように、本学学生のスコアは250点前後に集中している。（全大学のトータルスコアによれば、大学生は550点前後のスコアを取る層がもっとも多い。）これらの分析によって、本学学生の英語力が全国の大学生平均と比較してもかなり低いという結果に至った。

6）入試における英語受験の有無と CASEC スコアとの相関性

健康福祉学部全体の英語力が低い理由としては、入試における英語学力試験受験の有無が影響していることが考えられる。本学では平成21年度入学者については健康福祉学部・リハビリテーション学部・こども学部の全学部において CASEC を実施した。学部別・入試英語受験者別のトータルスコア平均と TOEIC 換算スコア平均を示したものが図８である。

健康福祉学部全体のトータルスコア平均323.5点に対し、同学部の入試英語受験者のスコア平均は372点であった。TOEIC 換算スコア平均は健康福祉学部全体が267.5であるのに対し、入試英語受験者の平均は308.8である。平成21年度入学生（理学療法専攻のみ）に対し、推薦、一般Ⅰ期、Ⅱ期入試ともに英語が必須であったリハビリテーション学部では学部全体と入試英語受験者とのスコア平均に目立った差はないが、それでも入試英語受験者のほうが若干高い。こども学部では、健康福祉学部と同様、学部全体と入試英語受験者とのスコア平均には比較的はっきりとした差異が表れており、トータルスコア平均は学部全体333点に対して入試英語受験者は404点、TOEIC 換算スコアは前者が276、後者が337であった。このように、入試で英語を受験した学生の方が受験していない学生よりも高い学力を備えている。大学入学後１年間での英語力の低下が特に下位層において顕著に認められることは既述のとおりであるが、入試に英語受験を義務づけていない以上、英語を不得手とする下位層が増えていく状況は避けられないであろう。また、英語受験者数が年々減少している事実を考慮するならば、今後、入学者の学力はますます低下するであろうことが予測される。

図５　健康福祉学部英検相当級

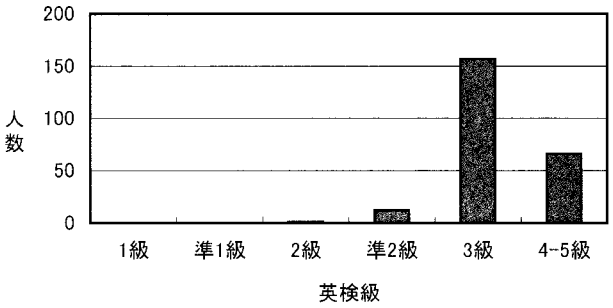


図６　健康福祉学部 TOEIC 換算スコア分布

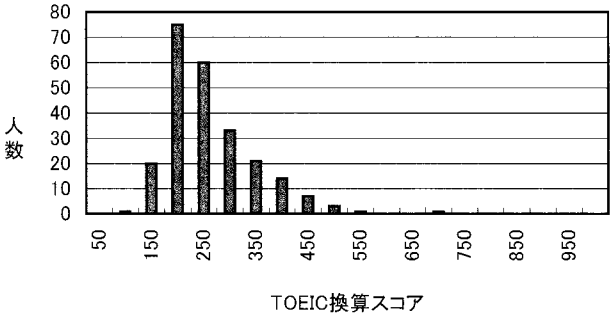
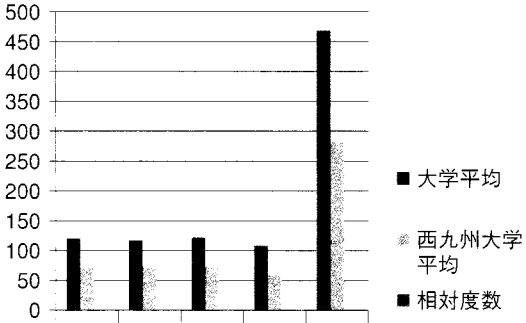
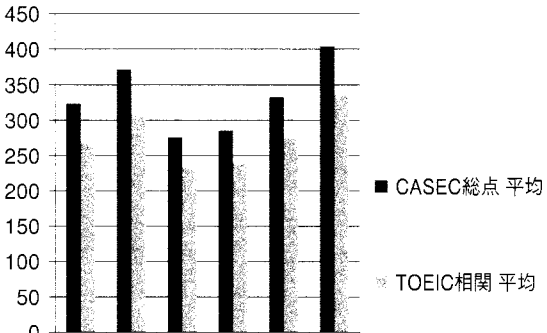


図７　CASEC 受験全大学と西九大との相対度数



	SEC 1	SEC 2	SEC 3	SEC 4	TOTAL
大学平均	120.9	117.0	122.3	108.4	468.7
西九州大学平均	72.4	74.3	74.2	61.1	282.0
相対度数	0.60	0.64	0.61	0.56	0.60

図８　英語入試受験者との比較



	健康福祉学部	入試英語受験者	リハビリ学部	入試英語受験者	こども学部	入試英語受験者
CASEC総点 平均	323.5	372	276	285.4	333	404
TOEIC相関 平均	267.5	308.8	234	239.6	276	337

Ⅲ　英語に対する意識調査の結果とその分析

2009年10月、健康福祉学部平成21年度二年生在籍者240名中、後期第一週目の授業の出席者204名（在籍者比85%）を対象に「英語に対する意識調査」（学科別、男女別記入、無記名）を実施した。調査は授業内で調査票を配布して学生に自記させた後、その場で回収した。（回収率100%）回答学生数204名中、男子学生が61名、女子学生が143名であった。以下、調査した項目の一部とその回答集計を紹介し、それらの結果について分析と考察を行う。

1．得意・不得意

Q４　あなたは英語が得意ですか。

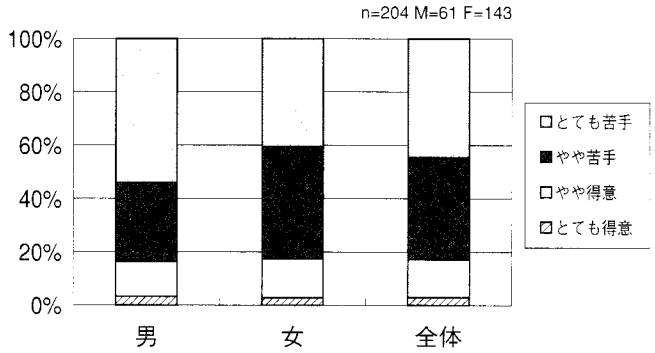
a．とても得意

b．やや得意

c．やや苦手

d．とても苦手

図９　得意／不得意



もっとも多かった回答は「とても苦手」(44.6%)、次が「やや苦手」(38.2%）であり、英語に対する苦手意識をもつ学生が全体の82.8%を占めることが明らかになった。「とても得意」(2.9%）または「やや得意」(14.2%）と答えた苦手意識のない学生は全体の二割にも満たない。男女別に見てみると、得意・不得意の比率はほぼ同じではあるが、「とても苦手」と回答した女子が40.6%であるのに対し、男子は過半数を占める54.1%であった。この結果から、いわゆる「英語アレルギー」の程度は男子のほうが強いと推測される。

2．苦手と感じた時期

Q４で「やや苦手」または「とても苦手」と回答した学生に対しては、次の質問を設定した。

Q４－２　あなたが英語を苦手と感じるようになったのはいつ頃からですか。

a．中学の前半から

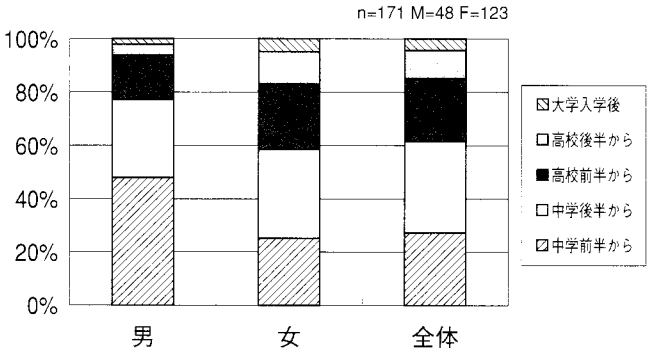
b．中学の後半から

c．高校の前半から

d、高校の後半から

e．大学に入学してから

図10　苦手と感じた時期



回答を多い順に挙げると「中学後半から」(26.9%)「中学前半から」(21.5%)「高校前半から」(18.6%)「高校後半から」(8.3%)「大学入学後」(3.4%）であり、全体の約半数が中学校の段階で苦手意識が芽生えたことを自覚している。特に男子に関しては「中学前半から」(37.7%）と答えた者がもっとも多く、英語教育の開始時点においてすでに学習面でのつまづきを経験していたことがうかがえる。

3．英語学習で難しいこと

Q５　英語の学習について特に当てはまるものを２つ選んでください。

a．文法が難しい。

b．英語を聞き取ることが難しい。

c．英語の文章を読むことが難しい。

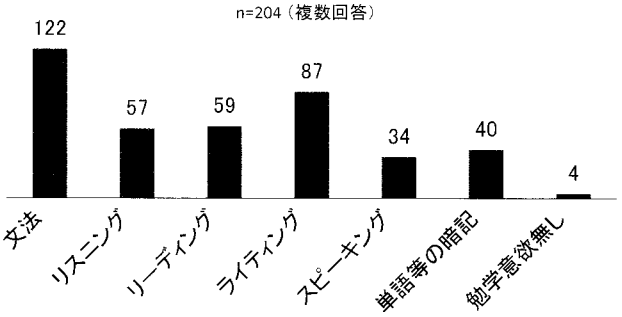
d．英語の文章を書くことが難しい。

e．英語を話すことが難しい。

f．単語や例文を覚えることが難しい。

g．英語に限らず勉強する意欲がわかない。

図11　英語学習で難しいこと



回答は多い順に「文法」(59.8%)「ライティング」(42.6%)「リーディング」(28.9%)「リスニング」(27.9%)「単語等の暗記」(19.6%)「スピーキング」(16.7%)「勉学意欲なし」(2.0%)という結果であり、「文法」をもっとも難しいと感じている学生が全体の過半数に達している。大半の学生が中学校の段階で英語に

対する苦手意識を感じていたことを照らし合わせると、語学習得の基礎となる「文法」の理解不足が、英語学習における最初のつまづきをもたらしたことは容易に推測できよう。本学において１年次前期に開講されている「英語表現Ⅰ」は、高校までの英文法の復習を主眼としたリメディアル教育的効果を狙った授業である。それでも、２年次後期の段階で英文法の習得を難しいと感じている層が依然として多いという調査結果を踏まえると、「英語表現Ⅰ」で扱う英文法の難易度を学生の能力別に再検討する必要があるだろう。なお、「文法」に次いで多かった回答が「ライティング」であったのは、調査時点からもっとも近い時期に受けた英語の授業が二年生前期の「英語表現Ⅱ」（主にライティングとスピーキングのスキルの養成）であることと関係があるかもしれない。一般に、文法やリーディングが比較的得意な英語学習者でも、ライティングを苦手とするケースは少なくないことから、これは妥当な結果であるといえる。

本学学生の英語学力の低さおよび苦手意識の強さについては既に分析したとおりであるが、にもかかわらず「勉学意欲なし」と回答した者は学部全体でわずか４名であった。つまり、個人によって程度の差はあれ、ほぼすべての学生が少なくとも授業で与えられた課題に取り組む意志をもっており、努力の結果、自分の弱点項目を認識しているということであろう。

４．英語への意識

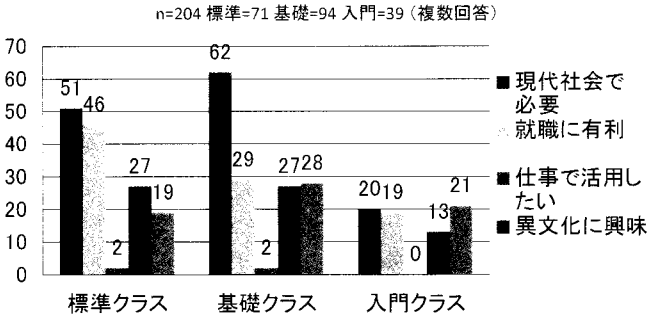
Ｑ８　次の項目についてあなたはどう思いますか。特に当てはまるものを２つ選んでください。

ａ．グローバル化した現代社会では、英語は必要である。
ｂ．英語ができると就職に有利／社会で活躍する機会が増える。
ｃ．少しでも英語を使う仕事がしたい。
ｄ．外国の文化（生活、習慣、食べ物、音楽、スポーツ）に興味がある。
ｅ．英語が話せなくても、将来、困ることはあまりない。

標準クラス（上位層）（71名）・基礎クラス（中位層）（94名）・入門クラス（下位層）（39名）別の調査結果は以下のとおりである。

まず、著しく回答が少ない項目は、入門クラスでは０名、標準クラスと基礎クラスでもそれぞれ１名しか該当しなかった項目ｃ「仕事で活用したい」である。健康福祉学部の場合、大多数の学生が福祉あるいは栄養の分野への就職を視野に入れているため、英語を活用する機会の有無が職業選択における主な要素とならないのは当然であろう。しかしながら、英語力が卒業後のキャリアにおいてプラスになると考える学生の数は決して少ないとはいえず、項目ｂ「就職に有利」を選んだ者は標準クラスでは71名中46名、基礎クラスでは94名中29名、入門クラスでは39名中19名であった。このような考え方は、学力的に上位の標準クラスにおいて特に顕著であるが、注目すべきは、英語学習に対して拒絶反応を示しがちな学生が数多く属する入門クラスにおいても、半数近い者が「就職に有利である」と英語の有用性を評価している点である。もっとも、入門クラスの場合、該当する項目二つのうちの一つとして項目ｅ「必要性を感じない」を選んだ学生の割合が、標準クラスの26.7％と基礎クラスの29.7％をはるかに上回る53.8％であり、すでに自身のキャリア形成から英語力を除外している層が過半数を占めていることも見逃してはならない。基礎クラスにおいても、「就職に有利」「必要性を感じない」と回答した学生の割合はほぼ同じであるが、それぞれ30％程度にとどまっている。

図12　英語への意識



福祉と健康を二本柱とした本学部の専門に特化したカリキュラムにおいて英語教育を行う場合、学習の動機づけとして「就職」というキーワードは全学生に対して必ずしも有効ではないかもしれないが、上級学年になるにつれて、英語受験を必須とする大学院への進学、採用試験で英語の知識が問われる公務員や教員採用試験を視野に入れた学生が増えるのが現状である以上、広い意味での「キャリア」をイメージさせる際に、少なくとも将来の可能性として「英語の必要性」を意識させることも大切ではないだろうか。

また、全体としてもっとも回答が多かったのは項目ａ「現代社会で必要」であり、標準クラスでは71.8％、基礎クラスでは65.9％、入門クラス51.2％と、学力にかかわらず過半数以上を占める結果となった。ここから、現代社会がグローバル化しているという言説が学生の間に浸透しており、そのような社会状況に限ってみれば一般論として英語は必要である、と考えていることが理解できる。このような意識をさらに高めるような授業内容を検討することが、学習の動機づけという点でも一つの課題となるであろう。

該当する二項目のうちの一つとして項目ｄを選んだ「異文化に興味」をもつ学生は、標準クラスでは38％、基礎クラスでは42.1％、入門クラスでは33.3％と習熟度

別クラスによる差はほとんどなかった。Q８では、学生の英語への意識においてどういうものが上位に来るのか優先事項を把握する目的で五つの項目のうち該当するものを二つに限定して調査したため、異文化への関心を示す層がこのように比較的低い数値になったようである。そのような制限がなければ、より高い数値を示したと考えられる。

５．身につけたい英語力

Q９　あなたはどのくらいの英語力を身につけたいですか。当てはまるものを１つ選んでください。

ａ．「英語」で良い成績（評価）がとれるくらいの英語力

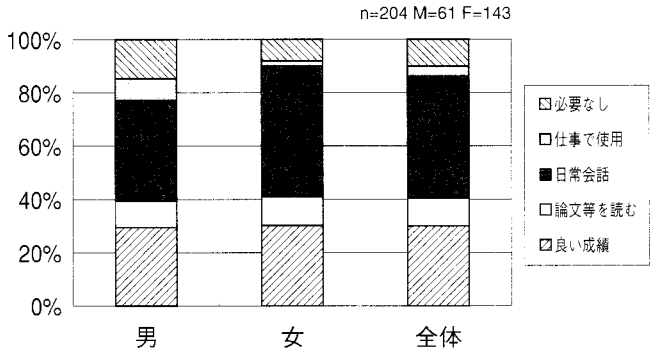
ｂ．専攻分野の英語の論文や資料を読めるくらいの英語力

ｃ．海外旅行や日常会話に困らないくらいの英語力

ｄ．英語を使って仕事ができるくらいの英語力

ｅ．英語を学ぶ必要をあまり感じない。

図13　身につけたい英語力



学部全体としては「日常会話」(47.0%)「良い成績」(30.8%) の順に上位二項目を占め、続いて「論文等を読む」(10.7%)「必要なし」(10.2%) という回答がほぼ同じ割合で、もっとも少ない項目は「仕事で使用」(3.9%) という調査結果であった。ここから浮かびあがる平均的な学生像は、グローバル化した社会において英語が就職に有利であると考えながらも「英語を使って仕事をする」という自己イメージは描いておらず、かといって「必要なし」と学習自体を放棄することはなく、日常生活あるいは海外旅行などの機会にネイティヴ・スピーカーと意思疎通を図ることができる程度の会話力を身につけたい、というものである。

英語の授業で良い成績を取れればそれでよいと考える者は、男子では29.5%、女子では31.4%と男女間でほとんど差はなく、おおむね三割前後の学生が必修単位習得のために義務的に英語を学んでいると考えても差し支えないであろう。「日常会話」レベルの英語力を身につけたいと思っている学生層を男女別に見てみると、男子の37.7%、女子の51.0%がこれに相当しており、どちらかといえば女子のほうが英会話に対する興味と関心が高いことが分かる。本学においては、ネイティヴ講師による「英語会話Ⅰ」「英語会話Ⅱ」を選択必修科目として開講しているが、それ以外の英語の授業においても会話的な内容を積極的に導入することによって、学生の学習意欲を高めることが可能かもしれない。

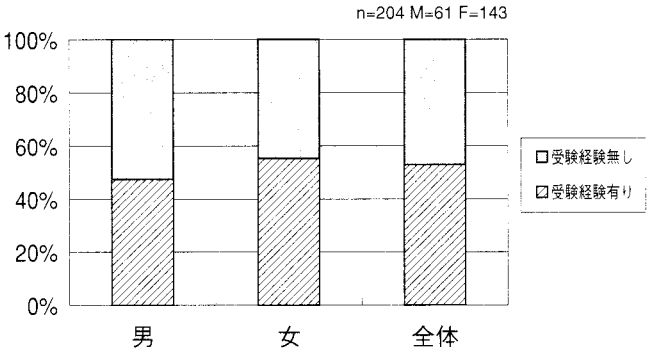
また、英語の論文や資料を読みこなす能力を求める学生が全体の一割程度に満たない点には、入学後二年間週一回の「英語」の授業以外に英語力が求められるような授業科目が存在しないという本学の教育カリキュラムの現状が反映されているようである。専門教育において英語が特に必須ではない場合、学習の動機づけを行うにあたっては、在学中あるいは卒業後にボランティア活動や旅行目的で英語圏の国々に行く機会があるかもしれないこと、あるいはアルバイト先でネイティヴ・スピーカーと接する可能性があることなど、主に大学の外での英語の有用性を学生にイメージさせることも重要であろう。

６．英検受験経験の有無

Q10　これまでに英検を受験したことがありますか。

ａ．ある。　　ｂ．ない。

図14　英検受験経験



「ある」と答えた学生は全体の52.9%であった。男女別では、英検受験経験のある男子は47.5%、女子は55.2%であり、女子のほうが受験率はやや高めである。但し、出身中学および高校によっては英検取得を学校単位で半ば義務的に奨励している場合もあるため、受験の有無が英語学習に対する興味をそのまま反映しているとは言い難い。

７．英検取得級

Q10で「ある」と答えた108名（男子29名、女子79名）を対象に、以下の質問を設定した。

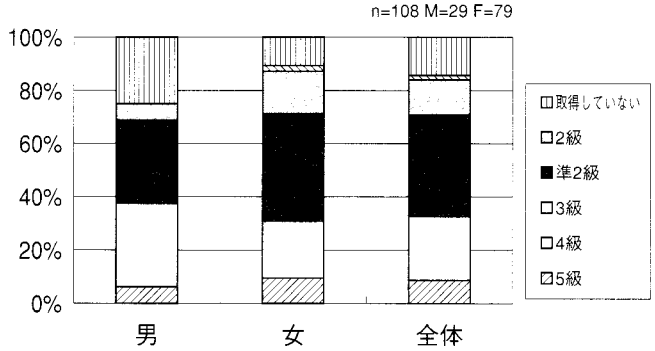
Q10－２　現時点で何級を取得していますか。

ａ．５級　　ｂ．４級　　ｃ．３級　　ｄ．準２級

ｅ．２級　　ｆ．準１級　　ｇ．取得していない。

結果は回答が多い順から「３級」(44.4%)「４級」

図15　英検取得級



（27.7%）「取得していない」（16.6%）「準２級」（15.7%）「５級」（10.1%）「２級」（1.8%）であり、準１級取得者はいなかった。男女別では、英検受験の経験はあるが級の取得にまで至らなかった層が、男子の27.5%、女子の12.6%に相当する。このことから、健康福祉学部２年次の有効回答学生204名中、現時点における英検級未取得者は114名（55.8%）であり、うち男子61名中40名（65.5%）、女子143名中74名（51.7%）であることが分かった。

ここで、前述したCASECスコアをベースとした英検相当級のデータに立ち返り、実際の取得級とCASECによる相当級との相関性を考察したい。平成20年度入学者が2009年１月、１年次後期のポストテストとして受験したCASECのスコアデータによれば、受験者236名中、英検３級相当と診断されたものは157名（66.5%）、４－５級相当が66名（27.9%）、準２級が12名（5.0%）、２級が１名（0.4%）であった。CASECの実施によって、今回の意識調査によって把握できた全体の過半数を占める英検級未取得者層の学力を「英検相当級の目安」という分かりやすい形で知ることができたのは、学生全体の英語力を客観的に把握する上で非常に役立つことであった。英検準２級を取得済みの学生は学部全体で204名中17名（8.3%）であり、CASECで同級相当の英語力をもつと診断された層は全体の5.0%である。２級についても、取得済み学生は0.9%、CASECの診断では0.4%という具合に、両者にはかなりの相関性が認められる。このことから、上位の英語力を備えた学生は、自主的に英検を受験してきたと考えられる。

しかしながら、本学においては英検２級以上に相当する学力をもつ学生は極めて少数派（CASECの結果によれば5.4%）であり、英語教育の課題としては、学力的に中位・下位に属する層に特に注目しなければならない。中学卒業程度の英語力を必要とする英検３級を実際に取得済みの学生は204名中38名（18.6%）であるが、CASEC診断結果による同レベルの層は66.5%である。さらに４－５級取得者を含めた「中学程度の英語力」（英検３級・４級・５級）については、これらの英検級を実際に取得済みの学生が204名中89名（43.6%）であるのに対し、CASEC診断結果による全体に占める同レベルの層は236名中223名（94.4%）と全体の90%以上に相当する。このように大多数の学生が中学程度の英語力しかもたないという現実を受け止めつつ、いかに本学において大学英語教育を実践していくかが今後の大きな課題である。

８．受けてみたい検定試験

Q11　以下の検定試験のうち、大学在学中に受けてみたいと思うものはありますか。受けてみたい試験をすべて選んでください。

ａ．英検　ｂ．TOEIC　ｃ．TOEFL　ｄ．国連英検

図16　受けてみたい検定試験

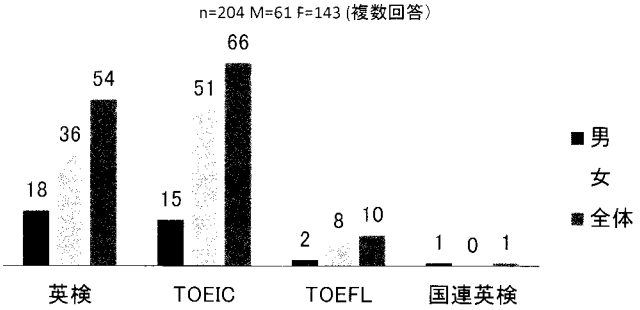
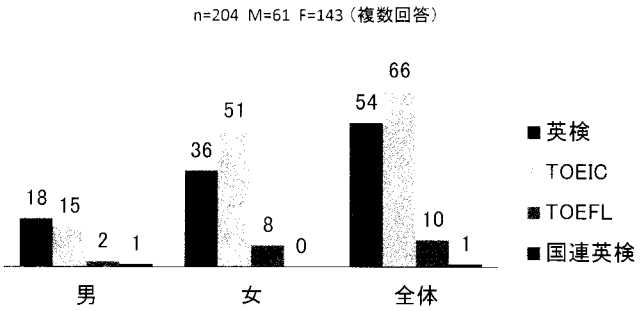


図17　受けてみたい検定試験



この質問は複数回答可であり、また、検定試験自体に興味がなく無回答の学生は204名中73名（35.7%）であった。以下、各項目を選択した人数の全体に占める割合を括弧内に記しておく。回答数の多い順から「TOEIC」66名（32.3%）、「英検」54名（26.4%）、「TOEFL」10名（4.9%）、「国連英検」１名（0.4%）という結果が得られた。TOEICと英検という、いわば二大検定試験に興味を示した学生層の割合はそれぞれ三割前後であるが、これまで考察してきた本学学生の学力レベルと、専門教育において必ずしも英語が必要ではない現状を考慮すると、これだけの数の学生が検定試験にある程度の関心を寄せているという事実は、今後、学習の動機づけを行う際の材料として積極的に活用できそうである。

上記の項目のうちTOEFLおよび国連英検については本学学生からの認知度自体がかなり低いと推測される

が、ここではむしろ認知度が極めて高い英検を抜いてTOEICが一位であることに注目すべきかもしれない。Q10の調査の結果、英検受験経験者が未経験者をわずかに上回ることが明らかになったが、Q11の質問内容が「受けてみたい検定試験」であったため、すでに過半数が受験済みである英検よりも目新しく、近年では大学生全体からの認知度も高いTOEICの方により高い関心が向けられたのではないだろうか。そして英検未受験者層には、「とりあえず挑戦したい」と思える検定試験として我が国においては伝統と実績のある「英検」が選ばれたと推測できる。男女別に考察すると、TOEIC受験への関心は女子のほうが高く、「受けてみたい」と回答した学生総数66名のうち女子は51名であり、77.2%を占めている。一方、英検受験への関心についても、「受けてみたい」学生総数54名のうち女子は36名であり、66.6%を占めている。男子では女子とは逆にTOEICよりも英検へ関心を示した者がわずかに多いが、それでも「受けてみたい」と回答した学生数における男女別比率では両検定試験ともに女子のほうが高く、全体的に、男子よりも女子のほうが検定試験受験に興味を示していることが分かる。

9．CASEC受験の良い点

Q12　情報処理室でのコンピュータを使った英語のテスト（CASEC）を受験したときの感想として、当てはまるものをすべて選んでください。

a．ペーパーテストよりも興味を持って受験することができた。

b．ペーパーテストのほうが良いと感じた。

c．試験結果がその場でわかる点が良いと感じた。

d．英検の級の目安やTOEICなどの換算スコアによって自分の英語力を知ることができてよかった。

e．自分が取得している英検の級と、試験結果に書かれた英検の級はほぼ一致していた。

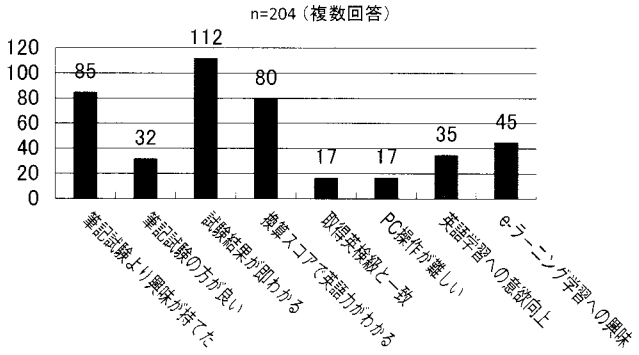
f．パソコンの操作が難しいと感じた。

g．自分の実力を知って、もっと英語力を向上させたいと思った。

h．コンピュータを用いた英語学習への興味がわいた。

この質問も複数回答であるが、上位三項目は「試験結果が即わかる点が良い」が204名中112名（54.9%）、「筆記試験より興味を持った」が85名（41.6%）、「換算スコアによって英語力を把握できる点が良い」が80名（39.1%）であった。CASEC導入前に実施していた筆記試験によるプレテストや通常の定期試験は、テスト単体のスコアを学生個人にフィードバックする機会を設けていなかったが、今回の調査の結果、自分の英語力を客観的に把握することに満足感を得た学生が全体の半数以上を占めていることが分かった。PCを用いたオンライン型のテストに対する反応も良好であり、筆記試験よりCASECに興味をもつ学生数は「筆記試験のほうがよい」と答えた学生数の2.65倍であった。換算スコア制を評価した学生層は、Q11で分析した検定試験受験に興味をもつ層とほとんど同じ割合で存在している。

図18　CASEC受験の良い点



次に、その他の項目について考察を行う。「取得している英検級との一致」を申告した者は17名と少数であるが、このズレについてはすでに考察済みであるためここでは省略する。「PC操作が難しい」と答えた学生が17名いる点については、今後CASECを実施する際に、試験監督者がPC操作について丁寧な説明を行うなど何らかの配慮が必要である。「英語学習への意欲が高まった」という回答は全体の二割弱であるが、これは従来の筆記試験によるプレイスメントテストでは得られなかった教育効果であるため、肯定的に解釈すべきである。また、CASEC受験をきっかけに「eラーニング学習への興味」が芽生えた学生も約二割いることが分かった。現在、2年次前期開講の「英語表現Ⅱ」の一部のクラスでは情報処理室においてPCを用いたeラーニングを主体とする授業を展開しているが、基本的に全学生が1年次にCASECを受験しているため、導入は比較的スムーズであるようだ。「コンピュータを援用した英語学習」という学生にとって新鮮で刺激的な授業方法を今後も積極的に導入し、少しでも学習意欲を高める工夫を重ねていくべきであろう。

Ⅳ　まとめと今後の課題

CASECによる英語基礎力評価の結果、本学学生の英語力は全国の大学生平均と比較してかなり低く、さらには、学生の入試における英語受験の有無と基礎学力レベルには相関性が認められることが分かった。入試における英語受験者の全入学者に占める割合が減少の一途を辿っている本学の現状を踏まえると、今後の入学者の英語基礎学力がますます低下していくであろうことが容易に推測できよう。今回の意識調査の結果を参考に、今後

増えていくであろう学力下位層の学習意欲を高めるための有効な方法を検討することが、緊急の課題であるといえる。

1）学習の動機づけと多様な授業形態

栄養や福祉、医療といった専門に特化した教育内容を特徴とする本学の場合、他大学のように民間企業への就職活動の一環として英検やTOEIC受験に対する学生の関心、要望も低く、また、上級学年における専門教育において必ずしも英語が必要とされないため、現在多くの大学が導入している「英語リメディアル教育」も現実的な選択ではない。なによりも、学生個人の意識およびニーズを反映させた「学習の動機づけ」を積極的に行っていくことが大切である。意識調査の結果、ほとんどの学生が英語に対して苦手意識をもっていることが明らかとなったが、にもかかわらず勉学意欲が全くない者はごく少数であり、英会話、検定試験、eラーニング、英語圏の異文化理解に関心を示す層もある程度存在していることから、学生個人のニーズは多岐にわたっていると考えられる。なお、平成21年度後期現在、今回の調査対象である健康福祉学部二年生が受講する「総合英語Ⅱ」の一部のクラスにおいては、「洋画から学ぶ総合英語と異文化理解」をコンセプトに、情報処理室のCALLシステムを使用したマルチメディア教育を実践している。映画の内容ならびに文化的背景を理解したうえでリーディングや文法問題を解き、さらには与えられたトピックについて各自がインターネット上の情報を収集するという演習型の授業であるが、学生の反応はおおむね良好である。これは、英語学習を通じて異文化を学ぶことに対する潜在的なニーズを引き出す一つの例であろう。

2）三段階クラス編成から少人数クラス編成へ

多様化したニーズに応える形で英語学習への意欲を促すためには、現行の習熟度別クラス編成を再検討する必要がある。現在、健康福祉学部における英語の授業では、「標準」「基礎」「入門」という三段階の学力レベルでのクラス編成を実施しているが、このような習熟度別クラス編成は、学生間の「学力のばらつき」に対応するために導入されたものだった。しかしながら、今回のCASECスコア分析による全国の大学生平均との比較の結果、本学学生のほとんどが学力下位層に属することが分かった。今や問題は「学力のばらつき」ではなく、「学生総学力低下」である。このような現状においては、三段階クラス編成の妥当性は疑わしくなる。学生個人のニーズを把握しながら学習意欲の向上を図るためには、より丁寧な指導を実現できる「少人数クラス編成」の導入を検討すべきである。

3）評価基準の設定

現行の三段階クラス編成の問題点としては、例えば、下位クラスにおいては学力上位者のモデルが欠如しているためクラス全体において学力向上への意欲が減少しがちである点が挙げられる。また、これは習熟度別クラス編成導入時からの懸案であったが、クラス間で使用教材のレベルや学習到達目標が異なるため「下位クラスのほうが良い成績を取りやすい」という状況を招きがちであり、この結果、成績評価において不公平が生じる可能性も否めない。したがって、クラスレベルの差を反映した公平性ある評価を保証できるような明確な基準を設定すべきである。この問題を解消するための策としては、「定期試験における統一テストの実施」「統一テキストの使用」を挙げることができよう。現在、使用テキスト、定期試験および評価方法は各クラス担当教員に一任されている。成績評価は定期試験に加えて、課題提出や授業内の小テストなどの「授業参加度」を考慮するケースが多いが、評価基準はクラスによってばらばらである。使用テキストを統一したうえで定期試験として統一テストを実施し、その結果を一定の割合で成績評価に組み込むことによって、評価の客観的な公平性は保たれるはずである。

以上、CASECによる学生の英語基礎力の評価ならびにその分析と、英語に対する意識調査の結果を考察することで、本学の英語教育が取り組むべき課題を明らかにした。大学入学者の総合的な学力低下が叫ばれるなか、少人数ゼミ制による丁寧な指導を特徴とし、それによって教育的効果を上げている本学においては、英語教育においてもやはり少人数クラス編成による授業を実践していくことで、ある程度の効果が期待されるのではないだろうか。確かに本学では、入試において英語受験は必須ではなく、また、専門教育においても英語力は必ずしも必要とされていないのが現実である。しかしながら、外国語習得には継続的かつ体系的な思考力が必要とされるし、特にリーディング力養成においては学習者の母国語能力が問われる部分も大きい。また、習得のプロセスにおいてその言語圏の文化に触れることで学習者の知的好奇心を刺激するという教育的効果もある。つまり、英語教育は、あらゆる学問の土台となる「言葉によって論理的にものを考える力」を鍛える場を提供していると考えられ、この意味において本学においても決して軽視すべきものではない。従って、専門教育と同様、英語教育においても、学生の学力低下や個別ニーズに応えることができる教育内容を今後も多角的に検討していく意義は大きいといえるだろう。

参考文献

1）小野紳一郎，小西敏雄，田路敏彦，中山慶治，松本達也「英語習熟度別授業の運営とその効果測定：

CASECを導入して」『松山東雲女子大学人文学部紀要』11（2003），161-171.
2）熊井信弘，木村恵子，大野純子「オンライン英語能力テストの実施とその評価」『言語・文化・社会』6（2008），185-204.
3）島谷浩「英語の外部テスト利用とその波及効果」『熊本大学教育学部紀要』56（2007），111-120.
4）杉森幹彦「英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定および測定に関する実態調査の報告」『政策科学』10-3（2003），3-26.
5）馬場佐和子「英語教育における到達度別クラス編成導入とニーズ分析」『永原学園・西九州大学・佐賀短期大学紀要』34（2004），5-13.
6）「読売新聞全国調査大学の実力2009教育力向上の取り組み」（2009），（読売新聞社）.

英語に対する意識調査

学年（　　）　　クラス（　　）　男・女

当てはまる記号を選び、右の□の中に記入してください。

Q1　前期の授業をどのくらい理解していましたか。

a. ほとんど理解できた。（90%）　b. だいたい理解できた。（70%）
c. 半分くらい理解できた。　d. あまり理解できなかった。

Q1-2　Q1でdを選択した人のみ回答してください。
あまり理解できなかったのはなぜだと思いますか。特に当てはまるものを２つ選んでください。

a. テキストが難しすぎた。　b. テキストの内容に興味が持てなかった。
c. 教員の授業の仕方がわかりにくかった。　d. 予習、復習等の勉強をしなかった。
e. その他

Q2　英語の授業で理解できないことがあったとき、あなたはどうしましたか。
特に当てはまるものを２つ選んでください。

a. 先生に質問した。　b. 辞書や参考書で調べた。
c. 友達や家族等に聞いた。　d. 特に何もしなかった。
e. その他

Q3　英語の授業の前後に、予習/復習をしましたか。

a. ほとんど毎回した。　b. 時々した。　c. ほとんどしなかった。

Q4　あなたは英語が得意ですか。

a. とても得意　b. やや得意
c. やや苦手　d. とても苦手

Q4-2　Q4でcまたはdを選択した人のみ回答してください。
あなたが英語を苦手と感じるようになったのはいつ頃からですか。

a. 中学の前半から　b. 中学の後半から
c. 高校の前半から　d. 高校の後半から
e. 大学に入学してから

Q5　英語の学習について特に当てはまるものを２つ選んでください。

a. 文法が難しい。　b. 英語を聞き取ることが難しい。
c. 英語の文章を読むことが難しい。　d. 英語の文章を書くことが難しい。
e. 英語を話すことが難しい。　f. 単語や例文を覚えることが難しい。
g. 英語に限らず勉強する意欲がわかない。

Q6　あなたが英語を勉強する理由について、特に当てはまるものを２つ選んでください。

a. 必修科目なので。　b. 専攻分野の勉強に必要だと思うから。
c. 就職/大学院進学等に必要だと思うから。
d. 英語が好きだから。　e. 視野が広がるから。
f. 外国に行きたいから/外国の人とコミュニケーションがとれるようになりたいから。

Q7　あなたは語学の選択科目で、これまでにどれを選択しましたか。

a. 英語会話　b. 中国語　c. フランス語　d. ドイツ語
e. 英語会話と中国語　f. 英語会話とフランス語　g. 英語会話とドイツ語
h. 中国語とフランス　i. 中国語とドイツ語　j. フランス語とドイツ語
k. 何も選択しなかった。

Q8　次の項目についてあなたはどう思いますか。特に当てはまるものを２つ選んでください。

a. グローバル化した現代社会では、英語は必要である。
b. 英語ができると就職に有利/社会で活躍する機会が増える。
c. 少しでも英語を使う仕事がしたい。
d. 外国の文化（生活、習慣、食べ物、音楽、スポーツ）に興味がある。
e. 英語が話せなくても、将来、困ることはあまりない。

Q9　あなたはどのくらいの英語力を身につけたいですか。当てはまるものを1つ選んでください。

a. 「英語」で良い成績（評価）がとれるくらいの英語力
b. 専攻分野の英語の論文や資料を読めるくらいの英語力
c. 海外旅行や日常会話に困らないくらいの英語力
d. 英語を使って仕事ができるくらいの英語力
e. 英語を学ぶ必要をあまり感じない。

Q10　これまでに英検を受験したことがありますか。

a. ある。　b. ない。

Q10-2　Q10でaを選択した人のみ回答してください。現時点で何級を取得していますか。

a. 5級　b. 4級　c. 3級　d. 準2級
e. 2級　f. 準1級　g. 取得していない。

Q11　以下の検定試験のうち、大学在学中に受けてみたいと思うものはありますか。
受けてみたい試験をすべて選んでください。

a. 英検　b. TOEIC　c. TOEFL
d. 国連英検

Q12　情報処理室でのコンピュータを使った英語のテスト（CASEC）を受験したときの感想として、
当てはまるものをすべて選んでください。

a. ペーパーテストよりも興味を持って受験することができた。
b. ペーパーテストのほうが良いと感じた。
c. 試験結果がその場でわかる点が良いと感じた。
d. 英検の級の目安やTOEICなどの換算スコアによって自分の英語力を知ることができてよかった。
e. 自分が取得している英検の級と、試験結果に書かれた英検の級はほぼ一致していた。
f. パソコンの操作が難しいと感じた。
g. 自分の実力を知って、もっと英語力を向上させたいと思った。
h. コンピュータを用いた英語学習への興味がわいた。